

東京大学大学院人文社会系研究科

次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣

帰国報告

2012年3月29日

東京大学大学院人文社会系研究科 社会心理学研究室 博士課程3年 澤海崇文
個人派遣

研究課題名

方略から見た謙遜の分類とその日中文化比較

Taxonomy of Modesty Along Its Strategy and the Comparison Between Japan and China

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

中国（北京）

中国科学院心理研究所（Institute of Psychology, Chinese Academy of Sciences）

蔡華儉（蔡华俭, Cai Huajian）

(2) 派遣期間

2012年1月27日から3月28日まで（62日間）

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

蔡教授は謙遜に関する比較文化研究を長い間続けていて、本派遣中に彼と共同で、質問紙を用いた実験的研究を行う予定であった。研究内容の背景として、先行研究で様々な謙遜の分類法が提案されていることが挙げられる。そこでは目に見える謙遜行動を分類しただけであり、謙遜行動の背後に潜む動機や意図された方略はいまだに検討されていなかった。そこで著者は、謙遜行動や謙遜表現を引き出す動機を分類することを目指した。

(2) 実際に達成された成果

当初の研究計画に基づき、謙遜の背後に潜む動機を2種類に分類することを試みた。この計画は、社会心理学においてすでに多くの研究者に受け入れられている2つの焦点、促進的か予防的かという基本軸に基づく（Higgins, 1997）。そして「促進的焦点により引き出される謙遜」と「予防的焦点により引き出される謙遜」に分類することを実証的に示す研究計画を立案した。促進的焦点とは肯定的な出来事に対する感受性が高く、理想を強く求める傾向を指し、一方、予防的焦点とは否定的な出来事に対する感受性が高く、義務を強く感じる傾向を指す。つまり、促進的な謙遜は何かしらの肯定的な出来事や理想を達成する

ために行う謙遜、予防的な謙遜は何かしらの否定的な出来事や義務を避けるために行う謙遜である。例えば、他者からの好意的な評価を得るために謙遜するのであれば促進的な焦点による謙遜、他者からの否定的な評価を避けるために謙遜するのであれば予防的な焦点による謙遜である。

そこで、蔡教授や彼の受け持つメンバーたちを相手にこの研究計画を発表したところ、日本人である著者だけでは考え出せなかった、謙遜に付随する新たな概念が明らかとなった。例えば、謙遜は中国人にとって美德の 1 つと考えられており、謙遜を心から価値のあるものとして尊重するという傾向は、我々日本人にはあまり受け入れられていないものであるということが示唆された。このように彼らから示唆に富むフィードバックが得られたため、以下に述べる今後の検討が必要であることが明らかになった。

(3) 今後の研究展望

日本と中国は同じく東アジア文化に属し、東アジア文化圏内の人々は謙遜することが重要であるとされているが、その背後に潜む動機はまだ明らかにされていない。その動機を明確に整理するため、本派遣において 2 つの軸（促進的焦点・予防的焦点）を含めた研究案を作成し、蔡先生や他のメンバーから中国人特有の謙遜に対する考え方を学んだ。そこで、今後の実証的な研究として、以下のプロセスを踏む必要があると考える。

謙遜の背後に潜む動機を明らかにするためには、まず、中国人に特有な概念を見逃さないよう、日中両国において質的な研究を行う必要があるといえる。つまり、研究参加者に対して、謙遜をする動機を自由に記述してもらうような教示をする。そこで得られた典型的な回答（頻度の高い回答）をもとに、暫定的な謙遜動機尺度を作成する。その後、第二段階としてその尺度を日中両国の別の参加者に 5 段階尺度などで回答してもらい、因子分析と呼ばれる統計的手法を用いて、謙遜の下位概念（例えば、促進的謙遜と予防的謙遜）を確かめる。また、他の関連尺度（例えば、他者からの評価をどのくらい意識するかを測定する尺度）も同時に回答してもらい、それらとの関係を確認する。最後の第三段階は、実際に目に見えるかたちでどのような差異が見られるのかを検討するため、プライミングと呼ばれる手法を用い、各下位概念に対応する典型的な行動を実験室場面において観察したり記録したりする。以上のプロセスをクリアすることで、社会心理学的な視点からみて妥当性のある尺度が作成されることが考えられる。

また、このように確立された謙遜動機尺度は、東アジア文化圏での使用にとどまらず、他の文化圏においても使用されうる。最近の研究では、欧米においても謙遜は確かに大事であるという指摘もなされており、確かに度合いや強さは東アジアに比べたら弱いかもしれないが、1 つの重要な価値とみなされているといえる。そのため、まずは日本と中国において共通して使用されうる謙遜動機尺度を作成し、それを欧米文化に拡張して使用することも視野に入れることで、より広い視野から謙遜という現象をとらえられることになるであろう。